

富山如大地

— 第137号 —

発行人
亀渕 卓

発行所
富山市総曲輪2丁目8-29
真宗大谷派富山教務所
編集
富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799
教区・別院ホームページ <http://toyama.higashibetsuin.com/>
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



撮影者：生地 光

富山駅へ到着する北陸新幹線

大谷大学を卒業し、すぐに富山へ帰ってきてから四・五年後、山口益著の『動仏と静仏』を読んだ。しかし、その内容は私には理解出来なかつた。それから約一年後、宗正元氏（元教学研究所員）から「動仏」や「静仏」の下に「性」という字を置いて読むようにとの教示を頂いた。仏教はその様にして読むことが可能であるから普遍性を持っているとも教えられた。その本の内容を探究する事もなかつたので、本を読んだことすら忘れていた。

そして約三十年後、京都の岡崎別院で毎年開かれていた「大地の会」の学習会に参加した事があった。宮城顕先生の『大無量寿經』講義を中心として、宗正元先生や藤元正樹先生等の講義があり、講堂が満堂になる事も併せて感動した。しかしながら、諸先生方の講義はある一文句を除いて全く覚えていない。

その一文句とは何かと言うと、宮城先生が「根に帰る事を『静』と言います」と発言された事である。これは今でも私の脳裏にはっきりと刻み込まれている。そしてこの一文句が「静仏（性）」と結びつくのに二年余り掛かったと思う。

それから聴聞という意味について藤元先生からだつたと思うが、目的を持って聴く事を「聴」といい、自然に聞こえすることを「聞」という、いう事を教えて頂いた。

もくじ

- ・真宗教学講座
藤原正寿氏 2~15
- ・「同朋会運動」寄稿
16~19
- ・研修会報告
20~21
- ・見聞～こんながやつっちゃ～
22
- ・参議会議員・正副教区
門徒会長に聞く 23
- ・教区だより
24~26



聴聞

真宗教学講座（一〇一五年五月十一日開催）

真宗の基礎～『歎異抄』第一条に学ぶ～

大谷大学准教授 藤原正寿氏

聞くとは

こんにちは。藤原正寿といいます。現在、大谷大学で真宗学の教員をしております。同時に金沢教区のお寺の住職をしております。『歎異抄』を詳しく読んでいくというよりも、『歎異抄』の第一条を通して我々にとっての本願の教えとは何かということを一緒に考えていく時間を持てればとのお話をいただき、今日を迎えたということになります。

御聖教について学ぶということは、御聖教そのものをきちんと我々が理解していくこともあります。御聖教に向き合う時間を共に持つと

いうことがすごく大事だと思います。

仏教の学び、特に親鸞の浄土真宗の教えを学ぶことは、どうやって学ぶのか、そして学んでどうするのかということもあります。親鸞の教えを学ぶはどういうことかと一回確かめがいるのだろうと思いません。ご承知のように、「解学」と「行学」

という言葉があります。普通、学ぶという場合、例えば御聖教を学んだりすることでも基本的に「解学」です。学ぶことを通して何か目的を達する。我々は子どもの頃から学ぶことは、学んだことによって必要な知識を身につけていくということがあります。最近は常に競争社会

であり、どれだけ自分が向上できる

のかということがいつも求められている時代です。どうしても仏教や真宗の学びもそうとらえられがちになります。皆さんもお寺の現場におられて感じると思いますが、御門徒さんは真宗の教えを学ぶことの大切さをいくらお伝えしても、聞く側の人

間に見てみたら、そのことを学んでどうなるのだ、ということがあります。どうなるのだ、ということがありま

ない。学ぶことを通して自分自身が向上していくのではなく、自分自身が知らなかつた自分自身のあり方がう学びをどうやって確認するのかとくにがすごく大事だと思います。真宗においては、聞法や聞思、聴聞といって、「聞」ということが学びの方法として大事にされます。ただ、我々は何かを得るために手段として「聞」ということがあると頭で認識してしまいます。親鸞は、仏教を理解する、あるいは自分自身の信心を得るための方法として「聞」ということを押さえています。

〔「聞」は、きくという。信心をあらわす御のりなり〕

〔『唯信鈔文意』真宗聖典 五五一頁〕

「聞」ということは決して手段ではなく、「聞」ということそのものが「信」を表すのだと。「聞即信」という言葉がありますが、「聞」という

ことはそのまま信心を表すことなのだと。だから、聞いてどうにかなるのではなく、つまり「聞」ということは手段ではなく、「聞」ということの大切さに目覚めることが信心なのだと、親鸞は押さえています。今まで自分は大事なことが聞けていたかった、と自分自身の姿が見えることが信心だと。言葉を換えていえば、「聞」ということの大切さに目覚めること、それが親鸞にとっての信ということです。だから、「聞」の過程の最後に究極的に信があるのではなく、「聞すなわち信」である。そこが親鸞の学びにおいて、他の学びと違う難しいところだと思います。

親鸞にとって大事なことは、法然と出遇ったということです。それ以外に親鸞にとって何もないのです。どうしても我々の頭で考えると、法然と出遇うことを通して、大事な本願念佛の教えに出遇うのだと理解されますが、そうではなく、法然に出遇ったという感動を持ったこと以外

に、親鸞にとつて本願の教えを聞き得たという感動はないわけです。ですから、法然との出遇いを親鸞は『教行信証』の中で、わざわざ年号を入れて、

突破していくのかが親鸞の最大の関心でもあり、同時に『歎異抄』という書物が必要とされた理由だと思いまます。

『歎異抄』は、親鸞の説法の内容が書かれた書物ですが、親鸞自身が書いた著作ではありません。著者は分かりませんが、おそらく唯円大徳

のだと、親鸞は押さえていました。今まで自分は大事なことが聞けていたかった、と自分自身の姿が見えることが信心だと。言葉を換えていえば、「聞」ということの大切さに目覚め

建仁辛酉の暦、雜行を棄てて本
願に帰す

〔教行信証〕真宗聖典三九九頁)

ること、それが親鸞にとつての信といふことです。だから、「聞」の過程の最後に究極的に信があるのではなく、「聞くなわち信」である。それが親鸞の学びにおいて、他の学び

と法然との出遇いこそが本願に出遇つたという意味だと押さえています。ここが他の学びと違う、真宗における学びの特徴であり、世間的な感覚では理解しにくいところです。

親鸞にとって大事なことは、法然と出遇つたということです。それ以

夕に親鸞にて何もなしのてす

照らし出すはたらきとしての本願

照らし出すはたらきとしての本願
に出遇つていくといふことがいかに
難しいか。つまり、我々はどこまで
行つても自分自身にプラスしていく
ような学びしか、学びとしては理解
できないのです。そこをどうやって

歎異の精神

外に親鸞にとって何もないのです。どうしても我々の頭で考えると、法然と出遇うことを通して、大事な本願念佛の教えに出遇うのだと理解されますが、そうではなく、法然に出遇ったという感動を持ったこと以外に出遇っていくことがいかに難しいか。つまり、我々はどこまで行つても自分自身にプラスしていくような学びしか、学びとしては理解できないのです。そこをどうやって

同時に、そのような自分を救わずんばおかない、浄土のいのちとして生かしめようという如来の「果」のはたらきに目覚ましめる。善導の「二種深信」として、『歎異抄』にはそ

一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをしるす。なづけて『歎異抄たんにしう』といふべし。外見げけんあるべからず。

『歎異抄』真宗聖典 六四一頁

向かって親鸞の教えを伝えるために書かれたというよりも、「同心行者」念仏の教えに集つた人の間に、いつの間にか親鸞の教えと異なる主張をしたり、そういう見解に立つ人が生まれてきた。そういう人の疑問に答え、間違いを正し、もう一度親鸞の教えの下に共にある我々であることを確認するために、涙ながらに書かれたのがこの『歎異抄』であると押さえられています。『歎異抄』そのものが、「異なることを歎く」という題名で書かれています。

もう一つ、親鸞が法然の下で念仏の教えを聞いていたときのエピソードが、『歎異抄』の後序に出てきます。そのエピソードがここに入れられているということの意味をどう押さえるかということは、『歎異抄』を見ていく中では大事だと思います。

法然聖人の御とき、御弟子そのか
ずおおかりけるなかに、おなじく
御信心のひとも、すくなくおわし
けるにこそ、親鸞、御同朋の御な
かにして、御相論のことそうち
けり。そのゆえは、「善信が信心
も、聖人の御信心もひとつなり」
とおおせのそうらいければ、勢觀
房、念佛などもうす御同朋達、

え、間違いを正し、もう一度親鸞の教えの下に共にある我々であることを確認するために、涙ながらに書かれたのがこの『歎異抄』であると押さえられています。『歎異抄』そのものが、「異なることを歎く」という題名で書かれています。

たくことなることなし、ただひとつなり」と御返答ありけれども、なお、「いかでかその義あらん」という疑難(きなん)ありければ、詮(せん)ずるところ聖人の御まえにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をもうしあげければ、法然聖人のお

には、「源空が信心も、如來^{ぜんと}にまわりたる信心なり。善信^{ぜんしん}」たる信心も如來よりたまわらせたる信心なり。されば、たゞ^{トシ}つなり。別の信心にておわしんひとは、源空がまいらんず士へは、よもまいらせたまいわじ」とおおせそうちいし。

おせには、「源空が信心も、如來よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如來よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる淨土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」とおおせそうらいしかば、

いること 자체は如来自身のはたらきによるのだ、ということを法然が押さえていたと。その上で、「私の信心とひとつでないという人がいたなら、私が生まれていく淨土には、そこの人は生まれていくことはできない」とまで法然は語っています。

つまり、法然の念佛の教えは「如來よりたまわりたる信心」ですから、本願力、回向の信によって淨土へ生まれていくことが、はっきりと親鸞の仰せとして唯円に伝わっていたのだ、と押さえられます。親鸞が他の兄弟子達よりもよく理解していたということではなく、また自慢話を親鸞がしたわけでもなく、再々注意しないと私達はいつの間にか信心を私有化してしまうという問題をいつも抱えてしまうのだ、ということなのです。我々は大事なものに出遇った瞬間に、その出遇ったものを自分のものとして私有化していくという問題性をいつもはらんでいる。そこが一番信仰の上で難しい問題だと。そ

のことを超えていくのは本願のはたらきなのだと我々がきちんと確認していくことに極まっていくのだ、と親鸞はいつも唯円やお弟子さん方に語っていたことが、『歎異抄』からうかがえます。

ていくような視点が、教えを聞いた人に欠落しているということを歎いて書かれたのが、この『歎異抄』だ

て いる と い う こ と で す。
『歎異抄』の第十条の中にある中
序には、

いるということが、『歎異抄』にとつて非常に大事なことだと。でも、これはあくまでも同じように念佛する人々ということです。いつでもどこでも誰にでも開かれている、親鸞が顕かにした本願の教えを共に聞いていく人々。そこに僧伽というものがいる。僧伽というのは決して閉塞的な、組織的な集団のことではありません。

しかし、唯円は自分達の教団の中で起こってきた異義の問題だけを取り扱っているのではなく、親鸞が顕かにした真実の教えに生きて欲しいという願いの下に書かれています。

おなじこころざしにして、あゆみ
を遼遠の洛陽にはげまし、信をひ
とつにして心を当來の報士にかけ
しともがらは、同時に御意趣をう
けたまわりしかども、そのひとび
とにともないて念佛もうさるる老
若、そのかずをしらずおわします
なかに、上人のおおせにあらざる
異義どもを、近來はおおくおおせ
られおうてそうちうよし、つたえ
うけたまわる。いわれなき条々の
子細のこと。

しかし、唯円は自分達の教団の中で起こってきた異義の問題だけを取り扱っているのではなく、親鸞が顕かにした真実の教えに生きて欲しいという願いの下に書かれています。

にか本願の僧伽を壊し、僧伽に背いていくようなあり方、経験によって人間を序列化していく自分自身になつていくのではないか。そのことをきちんと省みる眼と写し出す鏡を持つていなければ、我々はどこまで行つに背き続けていく自分自身のあり方を肯定するのではなく、徹底して照らし出す教えに出遇い続ける。「聞」という場を持ち続けること以外に、それはない。我々は分かつたという瞬間に分かつたことを自分の内容に

でも自分自身に足していくような、自分の手柄にしていくようなり方でしか仏教を身につけていくことができない。それが『歎異抄』の一番言いたかったことです。それは「同心行者」や「一室の行者」というかたちで問われてくる。共に生きあう仲間であるということを確認してしまう。そこに一番大きな問題を抱えているのです。それが『教行信証』の「化身土巻」の課題であり、第二十願の問題です。第十九願、第二十願から「果遂の誓い」を通して第十八願に眼が開かれていくということの問題性なのですね。その問題が、実は『歎異抄』の中にも展開し

それが唯円の批判精神の内容だと。言葉を変えると、真宗の教えというのは、

親鸞 人がためなりけり

『歎異抄』 真宗聖典 六四〇頁)

「一人」という問題で内容を押さえられますが、「一人」の内容は、どんな状況を生きるどんな人達においても開かれていく場であるということ。これは、一つの教団に身を置く者として、いつも考えないといけないことですね。

教団問題も、僧伽というものをどう考えるのかということですね。同朋社会をどう開いていくのかという問題として考えていく視点が、『歎異抄』から生まれてきています。そういう意味では、同朋会運動の原点は『歎異抄』です。もちろん、同朋会運動が起こってくる原流は清沢満之にあるということは「宗門白書」

の中で押さえられていますが、この『歎異抄』を理解するときの大きな柱になります。第一条の短い文章の中に、『教行信証』の柱となる「二種回向」と「二種深信」、真実教との値遇ということが全部収められています。

『歎異抄』を見てみると、本当によく読み込まれていたことが分かります。つまり、清沢満之の真宗の原点は『歎異抄』にあり、同朋会運動の源流をたずねていくと『歎異抄』、つまり唯円のこの「歎異の精神」がその源流になっていたらうと押さえられます。

『歎異抄』 真宗聖典 六二六頁) いらせて

『歎異抄』に語られる仏道の内容が、『教行信証』に書かれている親鸞の仏道にどのようになっていくのかということを確認する作業が必要だということに着目されたのが寺川俊昭先生です。例えば、『歎異抄』第一条の最初に、

一乗はすなわち第一義乗なり。ただこれ、誓願一仏乗なり。
『教行信証』 真宗聖典 一九七頁)

とあります。これは「一乗海」の解釈です。

異質であり、全部の条の集約的な条といえますし、また第一条からすべての条が展開しているともいえます。この第一条は、『歎異抄』全体を開いていく扇の要となる位置付けにな

ります。ですから、この第一条が『歎異抄』を理解するときの大きな柱になります。第一条の短い文章の中に、『教行信証』の柱となる「二種回向」と「二種深信」、真実教との値遇ということが全部収められています。

寺川先生、最近では延塙知道先生も仰っておられます。が、「誓願」ということと「不思議」ということは、別の事柄を一つに縮めた親鸞の用語だと考えられます。「不思議」がかと/or>親鸞の言葉に返してみると見えてくることがあります。

議な誓願にたすけられた、ということなのでしょうか。実は、『歎異抄』だけ読んでいたのではなく分からなくて、親鸞の言葉に返してみると見えてくることがあります。寺川先生、最近では延塙知道先生も仰っておられます。が、「誓願」ということと「不思議」ということは、別の事柄を一つに縮めた親鸞の用語だと考えられます。「不思議」がかと/or>親鸞の言葉に返してみると見えてくることがあります。

『教行信証』 真宗聖典 一九六頁)

涅槃ということに直結するような仏道を「一仏乗」と表現しています。「誓願一仏乗」という言葉はもともとどこにもありません。これは親鸞が作った言葉で、「誓願」と「一仏乗」を一緒にして「誓願一仏乗」という言葉で親鸞は押さえています。私は「誓願一仏乗」と同じように、「誓願不思議」も一つの事柄を一つの言葉で表現したと理解すべきだと思います。

本願のはたらきによって浄土に往生するということが実現する、とあります。我々の救いが実現する、生死出べき道がはっきりするのは、一つは如来の「御約束」だと。これは法藏菩薩の誓願、「因位」の本願。この「果位」の阿弥陀如来のはたらき。のはたらきの両面で語ります。『歎異抄』の第十一条は、「誓願不思議」とはどういうことかを説明しています。

(『歎異抄』真宗聖典 六三〇頁)

本願のはたらきを語るときに、親鸞は必ず「因」のはたらきと「果」のはたらきの両面で語ります。『歎異抄』の第十一条は、「誓願不思議」とはどういうことかを説明しています。

「因」と「果」

つまり、我々の上に本願が成就する。『歎異抄』の言葉では「如來よりたまわりたる信心」とあります。

かしいですね。煩惱の火を吹き消さずして、煩惱の火が吹き消された状態を獲得できる。日本語として矛盾している概念です。でも親鸞は、凡願に相応して、実報士に往生するなり。

凡夫のままで仏に成るということが成立しないのです。これが二種深信です。我々の宿業の機に呼びかけられる「因位」の本願と、我々を必ず涅槃の仏道に立たしめるという如來の「果位」のはからい、つまり阿弥陀の救いです。その二つのはたらきが成就しなければ、我々凡夫が凡夫のままで仏に成るということが成立しないのです。

かから、法然も親鸞も流罪になつたのです。「不斷煩惱得涅槃」という言葉一つとっても、当時の仏教の中ではものすごく大きな波紋を呼んだのです。

本来ありえないものが成り立つためには、二種深信として表されるよう、徹底して宿業の身を自覚する。つまり、自分自身のあり方が罪悪生死の身であることを徹底して照らし出すはたらきに遇う。それが阿弥陀の「因」の本願に遇うということです。

この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束あることなれば、まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいさせて、生死をいすべしと信じて、念佛のもうさ

不斷煩惱得涅槃
(『教行信証』真宗聖典 二〇四頁)

す。もう一つは、そういう者こそ救

わざにはおれないという阿弥陀のは

たらき。「果」の力として本願とい

うものがはたらくのです。だから親

鸞は願力を、「因」の力と「果」の

力の二つの力として説いています。

分かりやすく言うと、『正信偈』

の最初に、

帰命無量寿如來 南無不可思議光

(『教行信証』真宗聖典 二〇四頁)

とあり、これは「果」の力です。

「無量寿如來」とは、阿弥陀の救い

のはたらきです。そこに私は帰依す

ると。それから「不可思議光」とし

て表される阿弥陀のはたらき、「果」

の力を私自信が拠り所にします、と

いうことです。だから、普通の書物

と違って、『正信偈』は最初に結論

が書いてあります。最後のところに

は、

藏菩薩因位時」ところも、「果」

と「因」のはたらきによって阿弥陀

の本願に出遇うことの内容が表現さ

(『教行信証』真宗聖典 二〇八頁)

れている。だから、私の上に本願の力が具体的に信心としてはたらいてくることの内容を親鸞が述べる時は、基本的には必ず「因」のはたら

きと「果」のはたらきの両方を説明

しています。その両方はたらきが

ないと、私達凡夫の上に仏道が実現

することができます。その両方はたらきが

していません。その両方はたらきが

にいただいてみると、私の上に具体的

に信心として本願が成就したとい

うのは、この「因」と「果」のはたら

きによるのだ、と親鸞は押さえています。

なぜ親鸞は本願を、分かりにくく

表現しているのか。

なれば、「因」と「果」の両方を説明

しています。その両方はたらきが

していません。その両方はたらきが

願不思議」にたすけられるということは、阿弥陀の本願によつて私達が救われるということですから、阿弥陀の本願が私の上に成就することを、信心が獲得されると表現されている。獲得する責任はこちらにあります、が、獲得された信心は「如來よりたまわりたる信心」だと。そのことをなぜ「誓願不思議」と表現されるのか。「誓願」という「因」のはたらきと、「不思議」という「果」のはたらき、その「因」と「果」のはたらきによって我々に本願が成就するとということではないかと。『歎異抄』のこの部分は『教行信証』に返してみると、「因」と「果」のはたらきのことを表しているのだと思われます。

ではなぜ親鸞は、自分の上に成り立つ信心を「因」と「果」ということで押さえたのか。『歎異抄』の後序に、親鸞が弟子達にいつも語つていたという言葉があります。

案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐。そううらいしことを、いままた案するに、善導の、「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」(散善義)という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。

生きている凡夫をたすけるためである。従つて、如来の因力としての本願は、宿業の身を生きるということと直接関係するはたらきを持つのだと。だから、「親鸞一人」ということが直接我が身に呼びかけられてくるが、それは宿業の大地としていつでも誰にでもはたらきかけていく。誰とも代わることができない自分自身として、有限の存在としてあるこの我が身という宿業、曾我量深先生の言葉でいうと「宿業共感の大地」にしつかりと自分自身を着地させる。共に宿業の身を生きあう、共なる世界を生きている者。ここに「親鸞一人」と共に、という世界が開かれている。

「因」と「果」ということにおいて、その一人を宿業の身のところに着地させる。共に生きあうものとしての社会共同体を開いていくという意味合いが、「因」と「果」ということで表現する中に表されているのではないか、と私は思います。「因」

と「果」で何を表すのかということは、我々の身に救いが成り立つことは、淨土が具体的に私達の方にはたらくのだということを親鸞は言いたいのだと思います。

本願の歴史

親鸞が顕かにした淨土真宗という仏道の教えは、『大無量寿經』の精神に立つことです。

それ、眞実の教を顯さば、すなわち『大無量寿經』これなり

(『教行信証』眞宗聖典 一五二頁)

『大無量壽經』を読まないと、淨土真宗は分からぬ。お釈迦様は、大事な問いを発した阿難に自分の悟りの内容を語る時、自分のことは語らない。仏陀と呼ばれるようになつた自分自身の悟りの内容とは、実は私に先だってずっと昔から本願として一切衆生が救われてきた歴史があつ

たのだと。だから、私が救うのではなく、この世に人類が出現した時から人間の苦しみを救うはたらきを持つ仏が、ずっと我々のところにはあったのだと。人間の苦労に応じて起これてくる阿弥陀の本願があつたのだと。そのことに気付いたことがお釈迦様の悟りの内容であり、決してお釈迦様が「俺は分かった」という話ではありません。つまり、過去からいろいろな仏がいたという話を阿難に向かってお釈迦様がするのは、お釈迦様を絶対化してはいけない、ということです。阿弥陀の本願のはたらきのことをお釈迦様と「いうのだと。それは、今はお釈迦様と阿弥陀、阿弥陀と法藏菩薩の「因」と「果」の関係と同じです。阿弥陀仏を仰ぐということは、阿弥陀の本願の願いに目覚めるということなのだと。

如來所以興出世 唯說弥陀本願海
〔教行信証〕真宗聖典二〇四頁

「不虛作住持功德」が「眷屬功德」
として表現されています。世親の、

お釈迦様がこの世に出た意味は阿羅漢はお釈迦様の存在意義を押さえていました。

お釈迦様がこの世に出た意味は阿羅漢はお釈迦様の存在意義を押さえています。

観仏本願力 遇無空過者
能令速滿足 功德大寶海

(『淨土論』真宗聖典一三七頁)

莊嚴不虛作住持功德

「因」の誓願と「果」の仏力という思索は、もともとは親鸞に始まるのではなく、曇鸞の『淨土論註』から始まっているのです。阿弥陀の本願に出遇った者はどうなっていくのかという曇鸞の思索です。『教行信証』の「証卷」にてできます。

これが「不虛作住持功德」です。本願力に遇った者は阿弥陀の力に支えられて必ず仏にならしめられる、と世親が淨土のはたらきに遇った感動をうたったところです。ここを曇鸞が注釈して仏の本願力を、「本法藏菩薩」の願力と今の阿弥陀如来の「自在神力」という仏の力と、二つに分けて説明しています。

言うところの不虛作住持は、本法藏菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依つてなり。願もって力を成す、力もって願に就く。願徒然ならず、力虛説ならず。力・願あい府うて畢竟じて差たらず。かるがゆえに成就と曰う、

（『教行信証』真宗聖典二八二頁）

「因」と「果」のはたらきが共に響き合って、我々の上に本願が成就する。本願が成就することによって、私達は「眷屬功德」といわれるようになります。「不虛作住持功德」の成就を説くことによって、我々の上に「眷屬功德」が成就する。共に向き合っていくという世界がどこで開かれるか」というと、法藏菩薩の本願と仏の「自在神力」とがあいまって我々の上に成就することによって、淨土に触れるのだと。淨土の功德に触れることによって、私達は共に向き合つていく世界に生まれしめられるのだと。そのような世界に抱かしめられた。そのようなことを親鸞は、曇鸞の言葉を拠り所としながら、いつも語っていたのです。

おそらくこの『歎異抄』の「誓願不思議」を親鸞の思想に返せば、阿弥陀の本願と阿弥陀の仏力が我々に具体的にはたらくと。「弥陀の誓願不思議」にたすけられるということ

（『教行信証』真宗聖典三二六頁）

れる淨土のはたらきなのだと。その不虛作住持は、本法藏菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如來の自在神力による。法藏菩薩の「因」の願としての四十八願と、今日の阿弥陀如來の本願のはたらきなのだと。

『正信偈』もそうですが、本願のことを語るときに親鸞は、阿弥陀のはたらきと法藏菩薩の「因」のはたらきと、両方で語ります。本願が私達にはたらくのは、阿弥陀のはたらきと、両方で語ります。本願が私達にはたらくのは、阿弥陀のはたらきに私達が出遇う。阿弥陀のはたらきに救われるということは、阿弥陀

互いにあいまって実現しているのだ。私達の信心として阿弥陀仏の本願が成就していくのは、阿弥陀仏のはたらきと法藏菩薩のはたらきとがお互いにあいまって実現するということを表現しようとしています。

世親が説く「不虛作住持功德」、淨土のはたらきとしての本願が我あるということがある。阿弥陀は一切衆生の救いを顯す方便としてのかたちです。そのかたちの具体的な内容は、法藏菩薩の本願として説かれてくる。「願もつて力を成す」、法藏菩薩と阿弥陀とは別ではなくて、因位の法藏菩薩の願によつて阿弥陀の佛力というのが成じているのだと。阿

弥陀の仏力をもつて我々は願というものを触れるのだと。本願の成就とする淨土のはたらきが「不虛作住持功德」であると、曇鸞は述べています。この淨土のはたらきは、五つで差わず。かるがゆえに成就と曰う、阿弥陀の本願が成就するということは、「因」の願と「果」の仏力が、

互いにあいまって実現しているのだ。私達の信心として阿弥陀仏の本願が成就していくのは、阿弥陀仏のはたらきと法藏菩薩のはたらきとがお互いにあいまって実現するということを表現しようとしています。

話をする『歎異抄』に戻すと、「弥陀の誓願不思議にたすけられまゝせす」というわざか一言ですが、それは阿弥陀如來の仏力と法藏菩薩の願力とがお互いに照らし合いながら、我々を淨土に導く。淨土のはたらきに触れさせるちからであるといふとであれば、『歎異抄』の第一条は、王の善く住持力をして撰したまうところなり

この中に仏土不可思議に二種の力あり。一つには業力、謂わく法藏菩薩の出世の善根と大願業力の所成なり。二つには正覺の阿弥陀法王の善く住持力をして撰したまう

話を『歎異抄』に戻すと、「弥陀の誓願不思議にたすけられまゝせず。」というわざか一言ですが、それは阿弥陀如來の仏力と法藏菩薩の願力とがお互いに照らし合いながら、我々を淨土に導く。淨土のはたらきに触れさせるちからであるといふとであれば、『歎異抄』の第一条は、王の善く住持力をして撰したまうところなり

の「果」の仏力が、お互いに照らし合うながらはたらく世界こそが本願、淨土の世界だと曇鸞は押さえています。話を『歎異抄』に戻すと、「弥陀の誓願不思議にたすけられまゝせず。」といふと、その誓願不思議にたすけられまゝせず。淨土は法藏菩薩の本願のはたらきかける世界であり、功德であると。その功德に触れた私達の上にたらきかける世界であり、功德であると。その功德に触れた私達の上にたらき、「因」の力と、阿弥陀如來

本願力にあいねれば
むなしくすぐるひとぞなき

功徳の宝海みちみちて
煩惱の濁水へだてなし

(『高僧和讃』真宗聖典 四九〇頁)

「觀仏本願力 遇無空過者 能令速
満足 功徳大宝海」。だから煩惱の
身を変えることなく煩惱の身のままで
煩惱の身を突き破つて本願の方
から能動的にはたらきかけて下さる
のだと親鸞は押さえています。世親
も暁鸞もそうです。煩惱がそのこと
によってなくなるわけではないが、
煩惱の濁り水は隔てがなくなる。つ
まり、煩惱があることが浄土に生ま
れることを障害することにはならな
いのだと。むしろ、煩惱こそ我々が
淨土にいくための宝になるのだとま
で親鸞は述べています。

親鸞は、『論』と『論註』で押さ
えた本願の道理を踏まえて、本願の
救いが我々の上に成就することの実
際を、この「不虚作住持功徳」の内

容に託して述べています。「不虚作
住持功徳」は、仏力と願力がお互い
に照らし合いながら私達の上にはた
らくことだと押さえている。そのこ
とによって我々の上に実現するのは、
空しく過ぎない人生を賜るのだと。

親鸞は「むなしくすぐるひとぞなき」
というのは、

むなしくここにとどまらず

(『尊号真像銘文』真宗聖典 五一九頁)

と説明しています。この穢土にいな
がら本願を信ずることによって、淨
土に往生することが決定するのだと。
つまり、『歎異抄』の「往生をばと
ぐるなりと信じて念佛もうさんとお
もいたつこころ」が私たちに起こる
ことが、空しくここにとどまらない
ということです。その後の「能令速
満足 功徳大宝海」、親鸞の和讃で
は「功徳の宝海みちみちて 煩惱の
濁水へだてなし」は、私達の信心に

は、如來の智慧の海のごとく広く大

きなはたらきが、涅槃の方から私達
の身に満ち満ちてくるという感動。

「煩惱の濁水へだてなし」という感
動は、『歎異抄』に戻せば「摂取不

捨の利益にあづけしめたもうなり」

です。つまり、前半の「觀仏本願力
遇無空過者」は、本願の信心が語
られる。後半の「能令速満足 功徳

大宝海」という「不虚作住持功徳」
の部分は、救われた仏法の不思議の
感動が「摂取不捨の利益にあづけし
めたもうなり」と、分けて示されて

います。

と説明しています。この穢土にいな
がら本願を信ずることによって、淨
土に往生することが決定するのだと。

莊嚴主功徳成就

「弥陀の誓願不思議にたすけられ
まいさせて、往生をばとぐるなりと
信じて念佛もうさんとおもいたつこ
ころのおこるとき、すなわち摂取不
捨の利益にあづけしめたまうなり」
という『歎異抄』の第一条の一文は、
そのまま親鸞が『論』・『論註』を通
して学んだ「本願力にあいねれば

むなしくすぐるひとぞなき」という
形で説かれる淨土の「不虚作住持功

徳」が私たちの上に成就することを
述べている。だから第一条のこの一

文は、親鸞の思想に戻すと、濁世を
生きる私達の上に淨土が「不虚作住

持功徳」としてはたらいていること
を述べていると押さえられます。そ

の「不虚作住持功徳」の成就によっ
て、我々の恵まれる具体的なあり方
が「眷属功徳」として示されます。

「証卷」に「それ四海の内みな兄弟
とするなり。眷属無量なり」とあり、
「眷属」はここでは「如來の家族」

といふ意味です。「不虚作住持功徳」
の成就によって説かれる「眷族功徳」

の成就とは、「念佛もうさんとおも
いたつこころ」が私たちに起こって
「摂取不捨の利益」にあづかり、「四

海の内みな兄弟とするなり。眷属無
量なり」、限りなく如來の眷属とし

ての友を発見していく歩みとして、
私達の上にはたらいています。

『正信偈』では「共同心 ともに同

心に」ということです。

その「証卷」の一文の前に、

「莊嚴主功德成就」は、「偈」に
「正覺阿彌陀 法王善住持」のゆ

えにと言えり。これいかんが不思
議なるや。正覺の阿彌陀、不可思
議にまします。かの安樂淨土は正
覺阿彌陀の善力のために住持せら
れたり

(『教行信証』真宗聖典 二八二頁)

とあります。これも「不虛作住持功
徳」が成就したとき、具体的にどう
なることが淨土に生まれることなの
かが書いてある一文です。また、

法藏菩薩の出世の善根と大願業力
の所成なり。二つには正覺の阿彌
陀法王の善く住持力ををして撰した
もうちこなり
(『教行信証』真宗聖典 三一五頁)

これは「莊嚴主功德成就」のことが

書かれています。阿彌陀の淨土とい
うのは、「住持力」という阿彌陀の
力によって支えられている。この
ことですが、それは私達が優れてい
たのですが、それは私達が優れてい
るから、能力があるからではありま
せん。

「住」は不異不滅に名づく、「持」
は不散不失に名づく。

(『教行信証』真宗聖典 二八二頁)

ということです。その後にたとえ話
があります。

不朽薬をもって種子に塗りて、水
に在くに蘭れず、火に在くに燐が
れず、因縁を得てすなわち生ずる
がごとし。何をもってのゆえに。
不朽薬の力なるがゆえなり

(同)

ある種に「不朽薬」という朽ちること
がない薬を塗ると、その種は水に
浸けても腐らず、火に入れても焼げ
ない。つまり、種を水や火の中に置
いた後、どこかに植えたとしても芽

が出てくるのです。それは種が優れ
ているからではない。種に根拠はない
のです。この種というものは私達の
ことです。私達の上に信心は成り立
つのですが、それは私達が優れてい
るから、能力があるからではありま
せん。だからすると、淨土に生まれるとはど
ういのです。淨土に生まれたら、今度
は淨土というかたちで自分の上には
たらいている阿彌陀の本願によつて
我々が救われるのだということです。

もし人ひとび安樂淨土に生ずれば
ば、後の時に意「三界に生まれて
衆生を教化せん」と願じて、淨土
の命を捨てて願に隨いて生を得て、
三界雜生の火の中に生まるといえ
ども、無上菩提の種子畢竟じて朽
ちず。何をもってのゆえに。正覺
阿彌陀の善く住持を徑るをもって
のゆえにと。

(同)

親鸞は法然が亡くなつたと聞かさ
れて、なぜ京都に戻らずに関東へ行つ
たのか。「なぜ関東か」という話は
別にして、親鸞は法然が亡くなつた
時に、自分が法然からいただいた
「ただ念佛して弥陀に助けられまい
らすべし」という教えをもう一度確
かめ直した。そして、法然の教えに
導かれて淨土のはたらきを本願の教
えとしていたいた者として、今度

うことが、穢土にいながら実現する
のはどういうことか。今の曇鸞の話
のところです。この種というものは私達の
ことです。私達の上に信心は成り立
つのですが、それは私達が優れてい
るから、能力があるからではありま
せん。だからしてしまうことだけではな
いのです。淨土に生まれたら、今度
は淨土というかたちで自分の上には
たらいている阿彌陀の本願によつて
我々が救われるのだということです。

うことが、穢土にいながら実現する
のはどういうことか。今の曇鸞の話
のところです。この種というものは私達の
ことです。私達の上に信心は成り立
つのですが、それは私達が優れてい
るから、能力があるからではありま
せん。だからしてしまうことだけではな
いのです。淨土に生まれたら、今度
は淨土というかたちで自分の上には
たらいている阿彌陀の本願によつて
我々が救われるのだということです。

はいただいた大事な教えを他の人に伝えていくという願いを起こして生きる者となつたのだと。「浄土の命を捨てて願に隨いて生を得て」ですから、浄土に生まれることは、実態的にいえば浄土を捨てるということです。この穢土の中にはあっても、「不朽薬」を塗った種と同じように私達には阿弥陀の善力がはたらいています。「如来よりたまわりたる信心」が私達にいつもはたらき続けていますから、私達が仏の教えを求めていこうとする無上菩提の願いに、使命というものは決して朽ちていくことはないのだと。なぜならば、「正観阿弥陀の善く住持を徑るをもつてゆえに」、私達は娑婆の中に生きているけれども、いつも本願のはたらきをもつて我がいのちとして生きていますから、どの様な状況に置かれてもそのいのちが朽ち果ててしまふことはないのだと。だから、濁世を超えて浄土に触れるのですが、我々が生きながら果たしていくべき責任

は、この穢土で果たしていくのです。

淨土に生まれたり、信心をいたしたり、「念佛もうさんとおもいたつこころ」が起ころてくるというのは、決して個人的な信仰に留まらない。この穢土という人間の煩惱が溢れた社会の中で、全ての人が平等に救われていく本願の教えの尊さを、自分のいのちのかぎり伝えていくといふ願いに立ち続けて生きていくと、本願に触れて信心を得た念佛者とはいえないのだと。

「如來よりたまわりたる信心」が私達にいつもはたらき続けていますから、私達が仏の教えを求めていこうとする無上菩提の願いに、使命といふものは決して朽ちていくことはないのだと。なぜならば、「正

『教行信証』の中で押さえようとした浄土真宗という仏道の確信が、そのまま短い言葉として一文に表現されているのです。この第一条の言葉を確かめようとすれば、『教行信証』全体をきちんと読まないといけないのです。『教行信証』で述べられる

親鸞の浄土真宗という仏道との第一条は、決して違う質のことを述べているのではなく、また薄めてあるわけでもない。まさに親鸞の仏道の確信は、この第一条に端的に述べられていることが、『教行信証』をたずねていくと分かります。『教行信証』を読もうとすれば『無量寿經』を読まないといけないし、『無量寿經』を読もうとすると『論譜』・『論註』を読んでおかないといけない。

教団のいのち

お聖教を読む時間と空間を、いつも自分の生活の中にきちんと持つ。実践の中でこそ大事なものがあるということことは、親鸞がいつも述べていることだと思います。『歎異抄』の第一条は、『歎異抄』独自の見解が述べられているのではなく、親鸞が

は、この穢土で果たしていくのです。つまり、「念佛もうさんとおもいたつこころ」が起ころてくるというのは、決して個人的な信仰に留まらない。この穢土という人間の煩惱が溢れた社会の中で、全ての人が平等に救われていく本願の教えの尊さを、自分のいのちのかぎり伝えていくと、本願に触れて信心を得た念佛者とはいえないのだと。『歎異抄』を読むといつもそう思うのです。「法然、親鸞の教えは大事だ」といただいておりながら、いつの間にかその仏法を私有化してしまった教団にはあるのだろうと思います。『歎異抄』を読むといつもそう思っているのです。親鸞の教えは大事だ」といただいておりながら、いつの間にかその仏法を私有化してしまった教団にはあるのだろうと思いません。何が祖師の教えに叶うことなのか。それをいつも考え続けるという場を開いていかないことは、教団はいのちを失つてしまふのではないでしょうか。

長時間にわたりお聞きください、ありがとうございました。

実際にその教化が本当の教化になつてゐるのかどうかは、親鸞のところまでもう一回返して、教化とは何かということを論議し続ける必要があることを教団にはあるのだろうと思います。『歎異抄』を読むといつもそう思つてゐるのです。親鸞の教えは大事だ」といただいておりながら、いつの間にかその仏法を私有化してしまった教団にはあるのだろうと思いません。何が祖師の教えに叶うことなのか。それをいつも考え続けるという場を開いていかないことは、教団はいのちを失つてしまふのではないでしょうか。



教団は、教化をいのちとしています。

同朋会運動寄稿

今号は、富山教区内の様々な方々に、同朋会運動について寄稿していただきました。

同朋会運動の願い

第九組 樂圓寺住職

高山 芳文

「真の仏法者一人もなし」と言う深い懺悔から発起した運動であります。本来性を見失った寺院と門徒の現状に対する悲しみから、「門徒が眞の門徒となり、寺が聞法の道場となり、本廟が根本道場」になって、時代社会に応えうる教団を形成しようとする運動であります。

さて、今日の世相は、人間の尊厳性(いのち)が奪い去られるような事件が頻発し、人々は身の置き処を失い、不信、不安を抱き彷徨っています。世界に目を向けても、テロと報復攻撃が止むことなく、行き先の見えない戦争が広がりつつある。日本もそこに絡められ、再び戦争に向かう流れが強くなっています。

ところで、六年前程のことですますが、ある教区の組巡回で、宗祖聖人の御遠忌に向けて取り組む事業のすべては、同朋会運動の推進であり、念佛の僧伽を回復する嘗みでありますと申し上げておったところ、突然あるご門徒方が、「念佛では飯が食えません」とおっしゃった。本当にびっくりしました。よくお話を聞きますと、真宗のお寺は昔から聞法の道場と聞くけれど、こちらの依り処となる場になつていな。本当に感動を呼び起すよう、あるいは生きる力となるような教化事業がどこのお寺にもないではないか。更に言えば、このような現状で親鸞聖人の恩徳に報いる御遠忌が本当に勤められるのかと。大変厳しいご指導を頂いた記憶があります。つまり、寺院存在の本義を世に明かせと言う提言であります。

何れにしても、これから急速な少子高齢化社会、真宗の仏事が、親幸い、富山教区・富山別院では、

から子へ孫へと引き継がれることが難しくなる。したがって寺院環境はこれまで以上に厳しく問われる時代であると痛感します。

改めて、同朋会運動の願いに尋ねますと、人間解放の拠点を開く。平易な言葉で言えば、坊守会の皆様方が銳意取り組んでおられる「寺をひらく、私をひらく」と言う課題です。そしてその課題を一人ひとり担うと言ふことであります。

望まれる 同朋会運動の活性化策

第九組 長光寺門徒

飯田 久行

宗派では、同朋会運動の推進を宗門のいのちとして、一ヶ寺一同朋の会の開設を宗政の基本施策として推進されてきたが、現実は低迷しているように伺える。

まずは、寺院を中心に如何に活性化を計れるか。住職・門徒関係者が初心に帰り、早急に話し合いをする必要がある。ネットワーク等を構築し、不特定多数の者が参加できるよう模索すべきである。

このたび、真宗同朋会運動について元宗務役員として思うところを書いて欲しいとの原稿依頼を受けました。

振り返ってみると、本山や教区では、あらゆる人々を御同朋としていただけ念佛の生活者の誕生と、この濁世に念佛の僧伽を形成するとい

真宗同朋会運動に思うこと

第十組 覚證寺住職

館 寿人

このたび、真宗同朋会運動について元宗務役員として思うところを書いて欲しいとの原稿依頼を受けました。

振り返ってみると、本山や教区では、あらゆる人々を御同朋としていただけ念佛の生活者の誕生と、この濁世に念佛の僧伽を形成するとい

う願いのもとに、教化研修計画の立案や報告が毎年されており、一年間の点検や反省点など縷々(るる)担当委員の方々や宗務役員で熱心に話し合われております。全体的な把握を要する組織の限界や成果を求めるあまり、研修数や参加者数などに止まってしまっているような場合も多々あつたように思います。そのような時、蓮如上人の「一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大なる事にてはなく候う。一人なりとも、人の、信を取るが、一宗の繁昌に候う」(『蓮如上人御一代記聞書』)というお言葉と、同朋会運動発足時の宗務総長の訓霸信雄氏の「人を多く集めるな、一人でもよい。一人の人を大切に育てる。本物の人、回心の人を育てる」「回心なくして真宗なし」という信念のお言葉が、この信仰運動の要なのだと感じingおりました。

今年で真宗同朋会運動が提唱されて五十三年を経、今後も本山・教区・組など組織として大切な願いとの取り組みの中で、各寺院の情勢は様々なではありますかが、一カ寺一同朋の会結成促進などをはじめ、ご門徒方と直に接する現場である各寺院の役割は最重要であると、自坊に戻りあらためて思うことあります。

本年四月、本山「春の法要」の帰路、参拝者とご一緒に伏見の和光舎を見学しました。法衣や打敷を修理するという、京都ならではの珍しい作業現場を見る事ができました。今まで気付かなかつた七条や打敷は、精巧な刺繡でできていること、文様のものもいわゆるものばかりでした。それ自体が立派な文化財と言えるものであります。

昨年開催された、教区・別院の御遠忌讚仰事業である「百人百話」の大半を聞き、教区で講師になられたお寺さんを一軒一軒訪ねたことを思い出しました。

集落の中でひときわ目立つ甍(いらか)や山門、格調のある建物と周囲の佇まいなど、まさに日常生活に溶け込んできた私たちの文化風景そのものではないでしょうか。それを支えたのは御同朋であるなら、心の中で聖人の教えを守り、私たちの日常の支えにしてきたはずです。

御遠忌を終えた今、もう一度お寺と門徒とともに私たちの生活の大本を考え直す機会にしなければならぬと思ひます。

御同朋として

第十組 長龍寺門徒

松本 弘行

私にとつての同朋会運動

第十組 正覺寺副住職
見義 悅子

私にとつての同朋会運動

ないと思いました。

昭和三十七年、「真宗門徒一人もなし」、「家の宗教から個の自覚へ」をスローガンに歩み出した「同朋会運動」は、教団が宗祖の教えに立ち帰る必要性を痛感したところに表現した悲嘆の運動であったのだろうと感じています。しかし、寺に住まう坊守(寺族)にとって、その運動の重さが必ずしも伝わっていなかつたといつてもいいのではなかつただろうかと思います。ことに住職に頼る生き方をしてきた坊守にとって、個の自覚ということに具体性を持てなかつた。

同朋会運動十五周年に際して、これまでの運動の総括と点検が行われております。

一、古い宗門体質の克服

二、現代社会との接点をもつ

三、真宗門徒としての自覚と実践

こうして、施策に乗せられたことが教団における女性の同朋会運動の具体的な第一歩であつたと思います。韋提希のように浄土を願う人としての誕生を、そして恵信尼を坊守の理想像としてということで教団が願う坊守観が表現されたのですが、是非はともかく、正式に教団から対象化されたことによって、はじめて自分に自覚めるきっかけが持てました。今、教団のあちこちで具体的な立ち上がりを見せてくれている女性たち(朋)は、この時期に育てられたといつても過言ではないでしょう。

今あらためて感じているのは、この同朋会運動は鎌倉時代に唯円が書かずにおれなかつた『歎異抄』とびつたり重なるような気がしてなりません。

ん。『歎異抄』であらわした悲嘆が、後の世で「同朋会運動」としてあらわされた。唯円が願いとしたのは、真宗の教えに聞きながら現実生活を送っていく、その信仰の歩みを回復することだったと聞いています。とすれば今、同朋会運動の中味として『歎異抄』の中にあらわされてある「父母の孝養の念仏否定」「学問沙汰の念仏を拒否」、「悪人の念仏往生を主張」を今、この時代を生きる只中で、そして現実生活の只中で一人ひとりが確かめる課題としてあるのではないかと気づかされております。

そこに現代の問題の根っ子が、そして私自身の根っ子が見えてくることを感じています。

現実に立ち戻り、 今何をすべきか

第十一組 玉永寺住職

石川 正穂

二十年前、私は能登教区の駐在教導として三年間勤務しました。ある日、同朋会運動についてのレクチャーを新任の宗務職員にするよう、命ぜられた事がありました。歴史と理念について一通り話したところ、彼

は目を輝かせて「すごいですね。いつたいどこへ行けばその運動に参加できるのですか」と質問してきました。唚然としましたが、初めて聞くものを虜にする、同朋会運動の魅力を改めて知りました。

「人類に捧げる教団の運動」、「家の宗教から個の自覚へ」、「門徒が眞実の信心に目覚めた眞の門徒となり、お寺が聞法の道場として眞のお寺となる」・・・。同朋会運動はこうしたスローガンで彩られてきました。それは半世紀にわたって何人もの門徒、僧侶を魅了し、巻き込んできました。そうした先輩たちに出会い、私も育てられてきました。

しかし、残念ながら現実には同朋会はそれほど定着しませんでした。様々な自主的な聞法会が催され、たくさん講義録が作られてきましたが、それも下火になりつつあります。最近では教化計画のなかに「同朋会運動」という文字 자체がない事もあります。

これは間違った使い方かもしれません、同朋会運動も「末法」に入つたのだと、そろそろ自覚すべき時期がきたと思います。どんな素晴らしい社会運動も、時間がたてば形骸化し廃退していきます。教義もまたドグマと化し、現実と乖離していきます。

す。

同朋会運動に立ち返れという意見は多いのでしょうか、もう理念、理

想で動く運動は終わったのだと、いたん覚悟を決めた方が良いと、この頃思います。その上で現実に立ち戻り、今何をすべきかを自分自身で考える。学んできた教えは必ずと私を導いてくれるような気がしています（自灯明、法灯明）。

同朋会運動への思い

第十一組 淨徳寺門徒
佐近 和夫

我が大谷派で同朋会運動が始まつて五十年がたちました。富山教区の第十一組で推進員研修が始まったのは平成元年で、平成二年に本山にて後期教習を修了しました。その時の参加者でつくった「推進員の会」は、会員の多くの方が亡くなり、自然消滅してしまいました。私が参加した時の「推進員の会」についても、会の話も無い様です。

確かに自坊でかなりの期間にわたって「真宗生活講座」を開催したことありました。また、第十二組で行われたこれまでの「推進員養成講座」にもスタッフとして関わって来ました。しかし現状は、自坊で女性グループがお勤め練習と座談を中心とし

た日数は四百八十日余りになり、今となっては大変な事だったなと思います。

最近、各寺院では門徒の寺離れが進んでいる様な感じがします。どうでしょうか。私達第十一組も来年度は推進員研修の年度となり、門徒の募集が始まりますが、多くの人が参加される事を祈ります。

同朋会運動

第十二組 照善寺住職
轡田 普善

今回、『如大地』編集委員会から同朋会運動についての原稿の依頼を頂き、改めて自分は同朋会運動との様に向き合って来たのかを問い合わせを頂いた思いがしてきます。一方で、自分に同朋会運動を語る資格があるのかという思いも持ちました。

た集まりを続いているだけで、いわゆる「同朋の会」の結成には至っていません。

これまでの経過を振り返れば、私は同朋会運動と主体的に取り組んでいたとは言えないと思います。受動的な関わり方に終始してきたと言わなければなりません。こうした私の在り方が寺の現状に表れているのかかもしれません。

残念ながら一般の御門徒の皆さん殆どは「同朋会運動」という言葉すら認識していないと思います。どうしたらこの「運動」が広がりを持てるのかをこれまでの反省の上に立て考えてみなければと思っています。

同朋会運動に思う

第十二組 本傳寺住職

渕上 一知

昭和二十六年、暁鳥敏宗務総長は、宗務改革の日安を宗祖七百回御遠忌執行におき、「宗門各位に告ぐ」に「金の支給をうけてそうしたことを行ったのではないか」と述べられています。

昭和三十七年、寺が本当の寺となるとによって現代社会にこたえ得る教団を建てる運動として始まつた同朋会運動。「心から親鸞聖人の教えによって信仰にめざめ、全生活をあげて本願念佛の正信に立つていただくための運動である」と『同朋会運動宣言』にある。「教団問題」を機縁に寺、住職、門徒のあり方を問うことが始まつた。蓬茨祖運先生は「最も眠りこけていた私達が、夢より目ざめ立ち上がること」とおっしゃつている。

あれから五十有余年の運動を通して宗門はどう変わつたのか。それとも変わっていないのか。失つたものと得たものは、「家の宗教から個の自覚の宗教へ」。今、人間を形成すべき原点とも言える家は機能せず、個だけが突出し、一層の孤立と孤独を生み出している。聖人の教えを不惜生命の覚悟をもつて本当に伝えてきたのだろうか。相手に伝わって始めて「伝える」ということが成り立つ。「眠りこけていた私達」は本当に夢から目ざめているのか。それとも新たな眠りに入っているのか。

「お預かりの門徒に教えが伝わっているのか」「何も教えていないのだから、すまんという心がいるので

はないか」という先人の言葉が今痛く響きます。

同朋の会結成について

第十三組 光榮寺住職

井口 榮樹

村御講・寺御講の衰退と宗教離れの現今。蓮如上人のお言葉「談合」「一宗の繁昌」が念頭から離れなかつた。「他力信心の確立、宗教的信念の確立、そのことひとつのためにこの宗門というものが我々に与えられてあるのです。お寺がここに建つておるということは、そのことの他にないのです。」(出典後記)とある。

寺は聞法道場であることを寺の命

として回復する勝縁が「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」団体参拝と「宗祖親鸞聖人に遇うつどい」の事前事後学習会であった。事後学習会では全体会と四班編成での座談が

冒頭の宗教離れに関して、同朋の会参加者より「信心をこれからも若い人に伝えてゆくこと。東本願寺も若い人に伝えてゆくことが課題」と、本山・教区への要望として出ていた。

出典 「宗教的信念の確立」『松原祐善講義集』文栄堂刊 第一巻九三頁を水島見一著『大谷派なる宗教的精神』東本願寺出版部刊 三〇六頁に引用

『如大地』編集委員会では、第一三二号(1963年1月発行)から今号までの六号にわたつて、同朋会運動について掲載してまいりました。お忙しい中、原稿執筆を引き受けてくださいました方々に誌面をお借りして厚く御礼申しあげます。

研修会報告①

「声明作法講座」開催

【二〇一五年一月から月二回開催】

会場 富山東別院会館



講座の様子

私は長崎にて法務手伝いをしていました。毎朝の勤行で「声が小さい」「音が下がっている」とよく注意をされたものです。お勤めの現場にて初めて初めてわからされることに、困惑したことを思い出します。幸い、声明講習に積極的に参加させて下さったので、今回の「声明作法講座」へのお誘いも、素直に受け入れられました。さて、講習を受け思い出されたのは、親鸞聖人の「自性唯心に沈みて淨土の真証を貶す」(『教行信証』真宗聖典二二〇頁)という一文と、蓮如上人の、「寄り合い談合せよ」(『蓮如上人御一代記聞書』真宗聖典八七七頁)という言葉でした。一番大切な自分の頷いたことを他の人に尋ね、直すべきところをしつかりと確かめているかという、自らへの疑問が起きました。

今後もこの気持ちを忘れず、自己流にならないように、准堂衆の方々の指導を仰ぎ、精進していきたいと思います。

数年前より法務に携わる私だが、声明作法の基礎が曖昧であった。そんな矢先に富山教区准堂衆会による声明作法講座の募集をする。この講座は四ヵ年をかけて一月より九月までの月二回、基礎講座を受講するものだ。現在、受講生二十四名のうち女性は十名。知らないことを教わるのは何とも愉快しい。声明にも教學においても「分からぬ」という自覚が「聞く」ことを促してくれる。そのことを肝に銘じて学んでいきたい。

第十二組 勝福寺 大中臣千恵美

数年前より法務に携わる私だが、声明作法の基礎が曖昧であった。そんな矢先に富山教区准堂衆会による声明作法講座の募集をする。この講座は四ヵ年をかけて一月より九月までの月二回、基礎講座を受講するものだ。現在、受講生二十四名のうち女性は十名。知らないことを教わるのは何とも愉快しい。声明にも教學においても「分からぬ」という自覚が「聞く」ことを促してくれる。そのことを肝に銘じて学んでいきたい。

研修会報告②

「春の法要」団体参拝

【四月一日～二日】

会場 真宗本廟(東本願寺)

帰りのバスが黒部インターを過ぎた頃、車内には私とお説いした九人のご門徒さんだけとなり、そのご門徒さんに「一番心に残ったことは何でしたか」と質問しました。すると、

全員が同じく「音楽法要が一番良かつたです」と言われ、中には感動されたのか「胸が熱くなり震えて涙がこぼれるくらいでした」とさえおっしゃる方もおられました。私もその感謝の言葉を聞いて、熱いものが沸き立ち起こり、ご門徒さんの笑顔が霞んで見えました。

最後にこの団体参拝を企画してくださった教区の門徒研修小委員会の皆様にお礼を申し上げます。

第十三組 光照寺 藤條法彰

蓮如上人の弟子の道宗(生年不詳(一五一六年))は越中五箇山・赤尾谷の出身で、俗名を「弥七」といいます。一日のたしなみとして、朝には阿弥陀様の前で勤行してお礼をとげ、一月のたしなみとして、井波の瑞泉寺にお参りをしました。一年たしなみとしては、京都の本願寺にお参りを欠かさなかつたといいます。私と赤尾の道宗を比べると何ともお

恥ずかしい限りです。

「また来年、ご門徒さんを説いて、団体参拝をして、共に感動しあいたい」との新たな願いができ感謝しております。



研修会報告③

「岐路に立つ寺院、寺の存続は自明か?」開催

講師 鵜飼 秀徳氏（日経ビジネス記者） 会場 富山東別院会館

【五月二五日】



鵜飼秀徳氏

二〇一一年三月に放送されたNHKの「クローズアップ現代・岐路に立つお寺～問われる宗教の役割～」から、社会教化小委員会の議論が始まりました。「家族葬」・「直葬」・「墓の引っ越し」（鵜飼氏は墓のジプシー化と表現）・「寺離れ」など、今では定着しつつあるような現状をまず把握することを大事だと考え、今回の研修会を企画しました。

講師の鵜飼秀徳氏は、日経ビジネスの記者であり浄土宗の僧侶。コラム「宗教崩壊」を連載中。八百九十六の市町村が消えると話題を呼んだ増田寛也氏の「消滅可能性都市」からとらえた「消滅可能性寺院」は三五・六%、真宗大谷派は二八・五%という試算から講演は始まった。寺院消滅の現場、住職たちの挑戦、歴

史で見る仏教の衰退と話は進んだ。質疑応答が一段落したあと、今回は座談会を設けた。鵜飼氏から「住職とは何か」・「お寺の役割とは」・「お布施の額の提示の是非」・「お骨をゆうパックで送ることの是非」などを簡潔に答えて欲しいとの質問があった。結論を出す話し合いではなく、緊張しながらも真剣に考える機会と他の方々の考え方を聞くことができる有意義な座談会であった。



全体座談会の様子

第十一組 等通寺 高谷純夫

お寄せいただいたアンケートのお答えについて

『如大地』編集委員会では、前号より今後の誌面作りの参考とさせていただきための「アンケート用紙」を同封いたしております。アンケートへご協力いただきました皆様に御礼申し上げます。

その中で「今後、掲載して欲しいテーマ・執筆者名をお聞かせください」という設問に対し、真宗大谷派以外の方のお名前を書かれた方がおられました。その事につきまして、編集委員会にて話し合ったところ1冊の本をご紹介することとなりましたので、ぜひお読みください。

さよなら親鸞会

著者 瓜生 崇(うりうたかし) 価格 300円(税込)

著者は、「浄土真宗親鸞会」という新宗教に勧誘され入会し、熱心な信者となり、伝道布教活動にいそしんでいた時期があったが、糾余曲折を経て脱会し、今は伝統教団である真宗大谷派の寺院住職をしている。なぜ親鸞会に入ったのか。入っている間はどうのように考えどのような活動をしていたのか。どのようなきっかけで脱会したのか。そしてそれを今はどう受け止めどのような活動をしているのか。親鸞会でのことも、今の思いも、ともに率直に語られている。



※書籍の購入につきましては、富山教務所までお問い合わせください。

『如大地』編集委員会



今回の紹介は、

富山市仏教連合会の「花まつり」です。

去る五月十二日(火)、富山市仏教連合会の主催で、お釈迦様のご誕生をお祝いする『花まつり』が、総曲輪のグランドプラザにて、盛大に開催さ

れました。
「いのちかがやけ！」のテーマを掲げ、今年で、第六十五回を迎えた。

これまで、「幼稚園花まつり」は、富山市公会堂、県民会館や富山国際会議場をメイン会場として開催されてきましたが、三年前から「一般灌

年は初めて、メイン会場をグランドプラザに移して、一般灌

が開催されることにな

るが開催されることになっ

た。祝賀式典を午前・



「仏」が、グランドプラザで併せて実施されるようになりました。その主旨は、ご門徒や一般の市民にも広く開かれた「花まつり」をとの願いであつたと聞いています。そして、今

④ キッズコーナー（仏教関連グッズ・仏教書・花まつり弁当・アイスクリーム・ベビーカステラ）
⑤ 販売コーナー（陸前高田市の物産展・仮設住宅「ゆめ工房」のグッズ販売）など。

③ 佛教なんでも相談室
④ キッズコーナー（スープーボールすくい）
⑤ 販売コーナー（仏教関連グッズ・仏教書・花まつり弁当・アイスクリーム・ベビーカステラ）
⑥ 東北復興支援コーナー（陸前高田市の物産展・仮設住宅「ゆめ工房」のグッズ販売）など。



① 一般灌仏コーナー
② 甘茶試飲コーナー

さらにもう一つは、「慈光園」「愛育園」「セーナー苑」「めひの野園」「ルンビニ園」の各施設を訪問して、花まつりなどを実施しています。いずれの施設でも、入所者のみなさんから親しまれ、心待ちにされる訪問となっています。

さて、終戦から七十年。思えば、焼け野原となつた富山市中心部の復興がようやく目に見え始めた頃に、第一回「花まつり」が開かれたことになります。幾多の悲しみを乗り越え、未来に生きるいのちの輝きを求めた、当初の先達諸師の大きな願いが偲ばれます。今の時代にも通ずるその精神は、世代を超えて、力強く、多くの人々に受け継がれていって欲しいと思います。

宗派を超えて活動しています。このグランドプラザでの「幼稚園花まつり」のほかにも、施設慰問の活動を行っています。「ながれすぎ光風苑」・

参議会議員・正副門徒会長に聞く

一カ寺一カ寺が
「同朋の会」促進を

念佛者の行き方が問われる

今春に組及び教区門徒会員並びに参議会議員が改選されました。
このたび、参議会議員、正副門徒会長の方々に寄稿いただきました。

初心に帰る

参議会議員

第九組 長光寺門徒

飯田 久行



参議会議員に
再度選出され、
職務の重大さを
痛感していると
ころであります。

新参議会議員として

参議会議員

第十組 長龍寺門徒

松本 弘行



このたび、参
議会議員に選出
されました。六
月に開かれた参
議会に初めて臨
みます。

宗政には、当面重要な諸課題が山積しております。特に教区等の改革・教化活動の強力な推進・財務の改革等早急に改革推進しなければならない課題があり、慎重に論議を盡さなければならぬ要があります。このような重大な時期に選出されて、初心に帰り「真宗門徒とは、門徒たる者は」を思い起こし、宗門の護持興隆のため、宗政に寄与できるよう頑張る所存であります。

合掌

皆様のご鞭撻をお願い申し上げま
す。



このたび、富 山教区門徒会副 会長を拝命し、 身の引き締まる 思いです。

富山教区門徒会副
会長を拝命し、
身の引き締まる
思いです。

富山教区門徒会
会長に推挙さ
れ、その重責に
身の引き締まる
思いです。前期
は組の「同朋の会」の活動に専念し
ましたが、このたびは教区門徒会の
難しい舵取りに携わることになりま
した。教区内約三百名の組門徒会員
を代表し、また全国三十教区の教区
門徒会員の一人として、常に自信教
人信の誠を尽くして同朋社会の顕現
に努めたいと肝に銘じています。

富山教区門徒会
副会長を拝命し、
身の引き締まる
思いです。

富山教区門徒会
副会長を拝命し、
身の引き締まる
思いです。



このたび、富
山教区門徒会副
会長を拝命し、
身の引き締まる
思いです。私は
ちを取り巻く環境は日々変化してい
ます。最近、少子高齢化と若年層の
無関心に直面いたしますときに、念
仏者の生き方が問われてまいります。
真宗教化に努めることが願われます。
人は一人では生きていけない生物と
思われます。「自分が人に言われて
嫌なことは人にも言わない」。この
信念をもっていきたいと思いま
す。



このたび、参
議会議員に選出
されました。六
月に開かれた参
議会に初めて臨
みます。所属の予算委員会では、分から
ない部分は率直に質問いたしました。
また、一般質問も、新人の例は無い
と言われながらも、年一回の機会で
ありました。質問の内容は、いかなる場
合も実践が伴わなければと思ってお
ります。年度内に三回の研修会にも
事実を踏まえて研鑽を重ねたいと心
に決めております。

このたび、富
山教区門徒会副
会長を拝命し、
身の引き締まる
思いです。私は
ちを取り巻く環境は日々変化してい
ます。最近、少子高齢化と若年層の
無関心に直面いたしますときに、念
仏者の生き方が問われてまいります。
真宗教化に努めることが願われます。
人は一人では生きていけない生物と
思われます。「自分が人に言われて
嫌なことは人にも言わない」。この
信念をもっていきたいと思いま
す。

4月

1日	富山教区「春の法要」団体参拝
6日	社会教化小委員会 青少年幼年教化小委員会
8日	組織拡充小委員会 ハンセン病差別問題 ふるさとネットワーク会議
9日	寺族研修小委員会 富山別院報恩講実行委員会 臨時教区門徒会
13日	14日

1日	五一会(教区内物故住職追恩法要) 青少幼年教化小委員会
8日	真宗教学講座 『如大地』編集委員会 あいあう会定例学習会
11日	12日
14日	15日
16日	17日

5月

1日	五一小組同朋大会【西田眞因氏】
8日	真宗教学講座 『如大地』編集委員会 あいあう会定例学習会
11日	12日
13日	14日
15日	16日

6月

1日	北陸連区正副議長協議会
3日	あいあう定例学習会
4日	第九組同朋大会【西田眞因氏】
5日	広報実行委員会
7日	保護司会総会
9日	声明作法講座 【藤原正寿氏】
11日	12日
13日	14日
15日	16日

『如大地』第137号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。

声明作法講座
第十三組同朋大会【宮部 渡氏】

編集後記

庫裏の引き出しを整理していたら、ある写真が出てきた。およそ五十年前に当寺で行われた御開山七百回御遠忌法要の庭儀の様子が写っていた。それは舗装されていない道を先々代の当寺の住職が歩いているものだ。

同朋会運動も同じような時期に起こったものなのである。身近な者として、その当事者であつたであろう先々代の住職と先代の住職は今は既におらず、私自身「同朋会運動」という名前は知っているが実態は知らないものであった。生きた言葉として同朋会運動のことを聞いていきたい、そのような思いとしてこれまでの如大地では同朋会運動を特集のテーマとして取り上げてきた。家の宗教から個の自覚、このスローガンが警鐘としてきたかの如く、生活スタイルの変遷によって縦の伝統として継承されていく宗教という形が機能しなくなってきたのかもしれない。家や家族の形が流动的に変わっていく時代にあって、私たちにも柔軟な対応が強いらえてくる。話は変わるが、今年の六月、当寺で御開山の七百五十回御遠忌法要を勤めた。準備の過程で多くの方々に助けてもらい、この編集委員会の面々にも編集の作業を融通して貰つた。何とか御遠忌を終えたものの、御門徒には御遠忌といつものが、こちらの思いがあまり伝わっていかなかったように感じた。

門徒と一檀家と称するも、「個」の繋がりの希薄なことをどこか感じた。「家」の繋がりから「個」の絆へと、地道に変わっていく他ないような気がしてならない。末筆となりましたが、沢山の方々に原稿依頼に応えて頂きましたことをこの場を借りてお礼を言わせて頂きます。どうありがとうございました。